
俺と野球と奇跡（パワポケ10）

yoriduki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と野球と奇跡（パワポケ10）

【Zコード】

N9481X

【作者名】

yoriduki

【あらすじ】

親に流されるままに親切高校に入学することになった俺。

中学の時から続けていた野球部に入り、仲間とともに甲子園を目指して

日々練習していた。

だが、その前には中学校の時の「俺にとってのライバル」が立ちはだかる…

稚拙な文章だけど、よかつたから見てってください！

一日か一日に一話更新しようと思つてますが、そろそろテストが近いし、受験もあるので、更新スピードが遅れるかもしれないのですがよろしくお願ひします。

第1話 「一体俺はなつてこぐ？」（前書き）

この作品は、ほとんどパワポケ10成分で構成されています。
嫌な人は見ないでください。

第1話 「一体俺がひなつてこへ？」

「はあ、今日の練習も疲れたな……」

「そりでやんすね……」

そういうて、俺と親友の荷田君は最近住み始めた学校の寮へ戻つて行つた。

そして寮の部屋に着くと、

「おー、お前ら帰るのが遅ー…そいつあとポテチ買つてー…」
「え…」

先輩たちがいた。

俺達一年生はいつもこのよみうな先輩の雑務を過ごしながら生活してゐる日々だ。

とつあえずなぜこのよみうな生活をしてくるか教えておいで。

2週間ほど前・・・・・

「そろそろ俺も高校ビートルか決めないとなあ……」
「なら、この親切高校つてことはまだビートルかしら。」

親切？変な名前だなあと、思いながら、もづこひぐれに尋ねた。

「それってどんな高校？」

「なんでも野球が強い全寮制の高校らしいわよ。」

「俺野球は中学でやめるつて言わなかつた？」

「あれ、そうだったかしら、まあいいじゃない」

野球、野球か…

少し考え、俺は言った。

「うん、もう一度俺野球をやるよ。」

そつ、中学の時に、倒せなかつたアイツを倒したくて…

「それじゃあ、母さん行つてへるよ。
「こつてりうしあー」

「「」の高校バスでしかこれないんだな、しかも片道一時間だし…」

「本当に不便でやんすねえ。バスの本数も少ないでやんすし」

「え？君は？」

「おいら荷田でやんす。中学の時あんたの学校とも戦つたことがあるでやんすよ」

「荷田…あ、思い出したぞ、あの時のキャッチャーか。俺は西園寺 隼弥だ。よろしく」

「よろしくでやんす。そういえば、西園寺君も野球部に入るんでやんすか？」

「…ああ、もちろん」

そんな話をしてる間に俺たちは学校についた。

「えー、これから校長先生の話だ。よく聞くよつ」

「「」の親切高校では全寮制が（「）だから、これから君たちは外に出る必要がないのです。なぜなら、ここには

君たちに必要なすべてがそろっているのですから」

ガコン！

え…今の音って何？まさか…門が閉まつた音？俺これからやつていいけるかなあ…

球児移動中…

「俺が野球部の監督の車坂だ。ここでは親切なんて関係なしに、ビジネスやつていく。

そのつもりだからしつかり覚悟しておけ！」

おい、親切はどこいった。責任問題とかいいのか。

そして今。

さつきの寮の部屋で毎日同室の先輩たちにじょかれている。

荷田君がいるから俺一人だけじょかれてるわけじゃないからまだマシだけど…

ちなみに同室の先輩は飯占キャプテンと北乃先輩だ。

俺、本当にこれからやつていけるのかなあ…

第1話 「一体俺がひなつてこへ？」（後書き）

yoridukiです。初投稿なので、間違った言葉、文脈などが
あつたら指摘お願いします。

第2話 「ペラつて薄っぺらべて、価値が低い感じするわ

あれはいつだつたか。きっと中3の春だつたはず。

公式の大会で上位に入り、次の大会であたつた相手がアイツだつた。
アイツは俺と同じ投手で、4番だつた。

俺はアイツからヒットを打てず、逆にホームランを打たれて1・0
で負けた。

そんな夢を見て俺は起きた。

「西園寺君、早く起きないと遅刻するやんすよー。」

「え…あ、ああ、もうこんな時間か！」

急いで制服に着替えて寮を出る。なんとか朝のチャイムには、間に合つた。

…にしても懐かしい夢を見たな、俺。

そういうばー時間はなんだつたかな…

そつ思つて時間割を見てみると、

「H R 何するんでやんすかね？」
「ホームルーム

丁度隣から聞かれた。

「いや、なんで俺に聞くんだよ…」「知つてそうでやんすから」

なんだそれ。

「今から校内で使つ紙幣を渡す」

担任の大河内先生はそつ言つて、ペラとよばれる紙幣を渡してきた。

「先生、この学校でお金は使わないはずじゃ？」

「まあ待て田島、今から説明するから。」

まず、これはこの学校で使つお金だ。購買で使つたり、100ペラ
だせば一日間

だけだが、外に出ることができる。肝心のためる方法としては、ボ
ランティアを

することだ。ボラ（ソシ）をしたら学校側からペラが支払われる。こ
の200ペラ

はお試し用だな。言つとくが、ペラを取引したりするのは御法度だ
からな、解つ

たな？西園寺

「なんで俺に言つんですか！」

「お前入試の時点数低かつただろ」

「なら、越後だつて」

「あいつも確かに点数が低かつたが、今寝てるだろ」

二〇

ま、まあ 西園寺は 200 ペラを 手に入れた！

「西園寺君は何に使つでやんすか？」

「そうだなあ……」

帰る途中に荷田君が聞いてきた。でもなあ……

「まあ今の所はためておくれよ。何があるか解らないからね。」

「じゃ、まあ部屋でも入って話でもしちゃつか

ガチヤ

- 1 -

「あ、どうした? まさかもう使ってたりしねえよな?」

卷之三

しようと北乃先輩に100ペラ渡した。

「…ホントに使うことになつたでやんすね」「言わないでくれ…」

「言わないでくれ…」

越後アイツ大変だうな、先輩三人いたし。

適当に手を合わせておくか。

あー、もひずつとボランティアしてやるつか。

「そりいえば、ここって男子校だと思つてたら森の奥に女子寮があるんでやんすね！」

「普通に平地でつながってるだろ、警備員さんがいるけどな」

「え、そうだったんでやんすか！」

「だからといって行くのはやめとけよ」

「なんでやんすか？」

「あそこには警備犬や警備員さんがいっぱいいるからな。怒られに行くなら止めはしない

けどな」

「そ、そなんでやんすか…」

「ほら分かつたら俺のパンツでも洗濯しつけー」

森か…そのまま壁をよじ登つて外にも出れそうだな。
警備に見つかならなかつたらの話だけど。

第3話 「森の中の巨大女」

「はあ……疲れた……」

一昨日は部活のテスト、昨日は先輩のマッサージでもうぐたくただつた。

「屋上にでも行って休むかな……」

てくてくと屋上に向かって歩き出す。
そこでふいに足をとめた。

「音楽室から音? 一体誰が……」

まさか幽霊とも考えたけど、それはないだろ? な。
としあえず少し見てみるか……ん?

「あれ、田島じゃないか」

「お、西園寺、どうしたんだ?」

「お前こそ何やってんだよ、ピアノなんか弾いて」

「俺今度ピアノのコンクールに出るんだよ。だから練習してんだ」

「そうなのか、がんばれよ」

「おう。今度またよかつたら聴いてくれよ

「ああ」

そして音楽室を出る。

あの暗い顔の田島がピアノ?

「ブツW」

聞こえてたらしく、あとで殴られた。

「うーん、いい風！屋上は気持ちいいな！」

ここからだと学校のいろんな場所が良く見えるな。確かに向いの方には女子寮があるな。

遠くて女子の姿は確認できないけど。

「それにこの森って相当広いんだなん？あそこ今何か動かなかつたか？」

少し行ってみよう」

「はあはあっ！屋上からの場所まで相当遠いな！途中で警備員さんにつかりそうになつたし……！」

犬があそこにいる……！ヤバい、万事休すかつて、あれ？

「何かから逃げてないかあれ？」

もつ少し近づいてみると、今度はバンッと音がした。

「な、何なんだ？いつたい何が……」

さう近付くと、いきなり木の陰から女の子が出てきた。

「うわっ！」

互いに叫んだ。女の子はともかく俺が叫んだ理由？そんなの簡単だ。相手が185cmあれば誰でもじぶんだらつ。

「あ、あんたウチの学校の男子……？」

「あ、うん。君は？」

「私もここの中生徒。大江 和那おおえ かずな」つていうんや。よろしくな

「俺は西園寺。よろしく」

「それはそうと、なんでここにあるんや？ここには生徒禁止の場所やのに……」

「うひー。」

た、確かに……

俺が屋上にいて見たものなんて知らなさうだけど……いや、もしかしてこの子か？

「俺は……少し用事で」

「用事いー？こんなとこにか？まさか女子寮じょりょうで……」

「ち、違うってば！そういう君はどうなんだ？」

「う、うち？あの…武術やつてて」

「武術？あのバンッていつてたやつ？それなら学校でやればいいじゃないか」

「ウチ身体が大きいやろ？だから、身体振りまわすだけでも迷惑やねん」

「柔道とか空手とかつて、そんな身体激しく動かしたか？」

「いや…うちやつてるの槍術やから」

「やり？なんでやりなんか…もつと剣道とかにすればいいのに」

「ああ？剣？いいか槍つていうのはな、もともと~~~~~」

30分経過

「つていうことなんやぞ、分かつたか！」

「わ、分かりました…」

まさかこんなとこりで槍の話を長々と聞くことになるとは…

犬が来てたらどうしてたん…あれ？

30分もいたのに一向に犬がこないな、どうしたんだ？

「なあ」

「なに？」

「なんでこここんなに犬がこないんだ？」

「警備犬のこと？」

「ああ」

「そ、それは…ふ、普段一緒に遊んでるんやけど…さ、今日は来てないみ、みたいやな」

「うわー、急に拳動不審になつた。

まさかあいつ、いつつもあの犬を撃退してゐるのか…
しかもそれを「遊び」と…これから逆らわないでおけ…

「さあ次はあんたの用事やな」

「え? 言わないといけないの?」

「当たり前やろ… あ、もしかしてホントに女子寮目当て?」

「だから違うつて! 僕は屋上から森を見て、人影が見えたから來
たんだよ」

「人影… まさかオバケ! ?」

「いや、ちがうだろ」

「あれ、オバケ信じてへんの?」

「まあな」

「ちなみにそれってどこいらへんで動いたん?」

「ええつと… 屋上で見たのがあそこだから… もつとあっちの方かな」

「ええつ 本当に! ? やつぱりオバケやん! 」

「え、君じゃないの?」

「私はすうとうじにいたで?」

じゃああればこの子じゃないのか… まさかオバケじゃないよな?

俺の後ろでオバケが嫌いなのか、頭を抱えながら「うあー」って大
江が叫んでいるが。

これは今度また調べる必要があるかな…

「パワポケ君ホントにどこに行つたでやんすかー！洗濯ものを一人でやる羽目になつたで

やんす…」

「いいからさうさと手を動かせー！」
「わーすいませんーでやんす」

荷田君は今日もじいじがれでいる。

第4話 「チーメメイトと縁の髪の女のト」

前にあつた森の事がビリしても氣になるのでまた屋上に行く」とした。

まあ会えるかどうかは分からぬけど…

それにも、

「因数分解って何なんだよ。なんで勝手に分解するんだよ。自然のままにしておけよ。
だから数学は嫌いなんだつて…ん?」

ガサガサツ

「やつぱり森の方で誰かがいるな。しかも…先生じゃなく女の子っぽいし」

場所を考えると大江ではないことが分かつた。
残念ながら今日は部活があるからグラウンドにいかないと行けないんだけど。

「今度こそ尻尾をつかんでやるぞ」

そう思つて俺はグラウンドに向かつた。

練習の休憩時間に部室に入るとそこにはチームメイトの官取がいた。

「官取、何してんだそんなんじで？」

俺が話しかけると、

「いや、家のコツクが持つててくれた飴をなめてたんだ」
「家のコツク？お前って金持ちだつたんだ」
「ああ、うん…まあね。そうだ、君もいるかい？」
「ああ、それじゃあ貰おつかな」

そういうて俺は官取から飴を一粒貰った。

特に普通の飴と変わりはないんだけどなあ…

おこしいのかな？

そう思つて食べてみても特に普通に売られている飴と特に差異はない
かった。

「ふーん、結構普通の飴と変わりはないんだな

「そう？これ1粒1万円の飴なんだけど…君には合わなかつたかな

…

「い、1万円！？そりゃ言われるどなんか急におこしく感じられるよ

うな……

「ハハハ、調子がいい奴め」

「もし時間があつたら今度官取の家に連れてつてくれよ」

「まあ考えておくよ」

「おーい、監督から集合かかつたぞ」

チームメイトの越後がやつってきた。

「ああ、わかつた、いまいくよ」

集合された理由は単なるノックをするためだった。

「おーい、西園寺、そっちいつたぞー！」

「こんなの取れないって！ああ、奥の茂みの方に行つちやつたよ……」

……先輩のノック強

すぎるんだよなあ……先輩！茂みの方に行つてしまつたので取つてきます！

「せつせと取つてこいよ……」

そういう会話をしてから俺は茂みの方に向かつていった。

そうして茂みに入った所で、俺は一人の女の子の声を聞いた。

「いつたー…なんで急にボールが

ボール?もしかして野球のボールか?いや待て、そもそもなぜここに女生徒?

ボールを探すついでに探してみるか。

ガサガサ。

するとそこにはボールを持った、緑色の髪の女の子がいた。

「あつ、やつぱり女の子だ!なんでここにいるんだよ…それにその手に持つてるのは

野球部のボールじゃないか!」

「あつやばい!見つかっちゃいましたよー!びつよつ…そ、そうだとこのボールで!

テヤッ!」

「ちよ、おま、この近距離で全力でボールを投げるなあ!つわああつ!」

「あつ、またまたヤバイです!ボールで氣絶させちゃいました!よし、逃げよう!」

あいつ、一体何なんだ…

「西園寺君、遅いでやんすよ!先輩がカンカンに怒つてやんす…って

びつじたでやんす、何があつたでやんすか!」「へーん…」

そのまま俺は保健室に行つた。

桧垣先生に診てもらつたところ、幸い打ち身程度だったようで、特に何もなかつた。

なんでこうなつたか聞かれたが、女生徒のことを見つたらやせらしくなるから言わなかつた。

「にしても無事でよかつたですねえ。」

「あ、はい、桧垣先生」

「そうだ、ちょっと飲んでほしいう薬品があるんですが」「なんですか？危ない薬品とかじゃないですよね…」

「何、単なる精神安定剤ですよ。少し効果を確かめたくて」「まあいいですけど」

そして先生から渡された薬を飲んだ。

むづ、特に何も変化はないけど…

まさかこれで超能力者とかにいきなりなつたりしないよな？

「じゃあ俺はこれで失礼します」

バタン

「彼は違つたようですね…」

保健室で何か聞こえたような気がしたけど、気にしないことにした。それより、あの女は一体何者だったんだろう？今度大江にでも聞い

てみよつかな...

第5話 「夏の公演試合」

「……」

先日のボールの痛みがまだ少し残ってる。

「あんな普通近距離でボールを投げるか？それよりあいつはあんまり何をしようとしたんだ？」

まあ気にしてもしょうがないと思い、荷田君と一人で昼食を取りに食堂へ向かった。

ここらの食堂の「はん上手いんだよな。

ただ、あの食堂のおばちゃんたまに無理やり食わせてくれるけど。それでもやっぱつづつまともんさつま。

「お、指田と田島じゃないか」

「お前らも駄飯か？西園寺と荷田」

「むしろここの時間に食堂に来て他にあらぬことがあるのか？」

「それもやうか」

他にも適当に話をしながら昼食を食べながら行く。
ちなみにここにはセルフです。

「あとはお茶と箸をひとつ…これでよしと」

指田の横に座る。

ふと、指田のほうを向いてみると、そこには大量の「はん」とおかずがあった。

いやいや待てよ、それ5人前はあるぞー？

…」「この腹の中ブラックホールにでもなつてゐんじやないか。

「あれ、どうしたんだ？」「飯食わないのか？」

「あ、ああ。今から食べるよ」

一緒に食べると、岩田が立つたので何かと思つて見てみると、おかわりしこいつてた。

(まだ食つのかよー)

心中で思つた。「こんな漫画みたいに食つやつこるんだな…と。

「俺、すげい量たべるだろ？」

「そんなに食つて毎から動けるのか？」

「うん。普段からこんなものだからね。けど、こんなに食つてこいつか身長が5m越したら

どうしよう…」

「ないない、ないからそんなの」

少し戦慄した。

もしさんな奴がいたら野球じゃなくボクサーとかになれよ。
ケンカだつたら絶対まけないだろうなあ…

「ホントに？ 身長めちゃくちゃでつかくなつたりしない？」

「ああ、そんなことないからビビり食え」

「うそ」

遠くから聞いてた田島と荷田は思った。

「なんかアホっぽい会話だな…」

「そうでやんすね…」

「おーい、全員集合！今から明日の試合のオーダーを発表する…」
「はー、監督…」

あ、そういうえば明日は公式の試合だけ。
まあどうせ一年生の俺たちは、あつたとしてもベンチ入りがいいと
こだりうねじ。

やつこひつこする間に監督が選手を読み上げた。

「……！今読み上げたメンバーがスタメンだ！今からベンチ入りを

発表する！」

「入ってくれ、でやんす！」

卷之二

くつ、なかなかよばれない……

「18番！越後！ 20番！田島！以上がベンチだ」

「なつ
...」

「悪いな、西園寺。勉強では負けてても野球では負けないぜ！」

「こと懸けりかどね」

る
!

הנִזְקָנָה בְּבֵית־יְהוָה

翌日。

（地方大会一回戦）

「俺たちはベンチに入つてないけど、一生懸命観客席で応援するや

！」

「やんすー！」

カキーン！カキーン！カキーン！

へえ、先輩達けつゝやるでやんすなあ…

「先輩達けつゝやるでやんすねー！」

「え、あ、うん。そうだな」

俺の心の中でも覗いたのか？

そういうふうしてゐ間に決着はついた。勿論けつゝの圧勝だ。

「へえ、高校になつたら地元の新聞記者もくるんだな」

「美人の女性に質問されてるでやんすー！先輩たち羨ましいでやんす

！」

「せーいかよ」

取材が終わった先輩たちが一いつぢへ来た。

「よつお前り

「あ、キャプテン」

「しつかり俺たちのプレーを見ていたか？」

「もちろんです！」

（言わないと殴られるしな…）

「そうか。だけど応援が小さかつたな。学校へ戻つたら即反省会だな」

スタスタ…

「…最悪でやんすね」

「…うん」

さらにその翌日。

俺の高校の野球人生はここから始まつたのかも知れない。

（地方大会一回戦）

「よし！今日戦う相手は分かってるな？キャプテン」

「ウス、監督！」

「今日の相手はあの星英高校だ。去年にとんでもない投手が入部したが、

スピードが早いだけで、変化球は対して曲がらない。ビビりうずバットを短く持つて

行け！」

「ウス！」

観客席にて。

「おい、あれ天道じゃないか！？」

「ホントか！？官取！」

「ああ、西園寺。あれは天道だよ」

「地元にこんな奴がいたなんて…最悪でやんす」

「確かに…あんな奴がいたら俺たち甲子園に行けないかもな」「うん…」

「何言つてんだ、荷田、官取、吉田…」

「な、なんでやんすか！？」

「あいつは俺たちが三年間戦つてく相手だろ？弱気になつてじりする…」

「そりだよなあ…うん、西園寺の言つ通りだ」

(天道…中学では負けたが、高校ではお前を倒して見せる…)

「よし、打つぞ…相手はただの一年だ、バビュの」とはない
「あ、飯占キャプテンが打つでやんすよー。
「がんばれキャプテン！」

ビュッ！
ズバーン！

「な、なんて早さだ、152km！？」んなの打てるわけねえ…」

結果 親切0 - 2 星英

星英ベンチにて

「おい、天道。お前5本もヒット打たれてるじゃないか
「すみません監督」
「これからは頼むぞ。この学校のエースを背負つてくんだからなー！」
「はい！」

「おこ……お前ひ。今田の試合。あれは一体何なんだ?」

「…………」

「おこ、西園寺。お前から野球を抜いたら何が残る?……答えひ。」

「え、ええと……じみであります!」

「よし、よくわかつてゐじやねえか!なら、1、2年はグランプリ5

0周して!」

「はい!」

「3年はこれで引退だ。あとで締めの一言葉を頼む」

「はい」

「いれで、飯占キャプテンともおなじでござりますな」

「ああ、わうだな」

毎日殴られたからなあ……もと解放されると黙つて涙がでてくる

…

さて、次のキャプテンは誰になるのかね?

第6話 「真キャプテンは…」

「全員集合ー！」

監督の指示のもと、練習をしてた部員が一斉に集まる。今日はあの負けた試合の日の後だ。ついに次期キャプテンとか決まったのかな？まさかいきなり俺とかじやないよな？

「…西園寺君、それはないでやんすよ」

「か、顔に出てたー？」

「むしろ聞こえて下せり」といつて言つてゐるくらいの顔だったでやんす、

そ、そーカ。俺つてそんなに顔に出やすいタイプだったのか。

「あ、監督の話が始まるだー！」

「…話を逸らしたでやんすね」

「ついでに。

「一年生はこれから甲子園を田指して頑張れ。俺たちは引退するが応援してるからな。

一年はあの天道と二年間戦うことになる。苦しげだらうが負けるな。短い間だったが、

今まで楽しかったぞ」

飯占元キャプテンが引退の言葉を告げた。

…中々いいことをいうなあ。

そして、それに次期キャプテンの基宗が答えた。

「はい！先輩の意思をしつかりと継ぎ、頑張りますー。」

「よし、いい返事だ。…後は任せたぞ」

そういうて三年生は引退していった。

「よし、それじゃあ各自練習に戻れ！」

「「ウス！」」

各自練習に戻る。

それじゃ俺も練習に…ってん？

「どうしたんですか？基宗キャプテン？」

「いや、何。さつき監督にな、『キャプテンになつたなら、新人の育成もやれ』と

言われてな。まずお前から育成もしようと思つてな」

「はあ…」

一体なんで俺なんだ？もしかして見込みがあるのか…？

……んな訳ないな。単に田についたからなんだろ。

「よし、じゃ始めるとかねか」

「え、今からですか！？」

「ああ」

今から何するつもりだよ……監督に言われたのさしげじゃなかつたのか？

キャプテンどんどん用具持つてきてるし…

あの人に前からやりたくてウズウズしてたんだろひつな。

うん、そりにちがいない。

きっとゲームにしたらマジでサインティーストになるだひつな。

「どうした？ 始めるぞ」

「あ、はい」

「今からバットとグローブを渡す。俺がボールを投げるから赤い玉
だつたら打て。

白い球なら捕るんだ」

「わかりました」

それで、と……あれは……白一

打つ
捕る

「おー、白の時はほとるんだー！」

「す、すこません！」

わあ、気を取り直して……赤！

打つ
捕る

「おい、赤の時は打つんだ！」

「す、すいません！」

その後も何回か続いた。

「結果は……三十球中十八球！まだまだ練習をする必要があるな
「今度は別のメニューをするんですか？」
「ああ、そうだな」
「後…ひとつ質問していいですか？」
「なんだ？」
「これ…役に立つんですか？試合中にバットとグローブ同時に持つ
」と無いですし…」
「…」

沈黙が続く。

まさか…」Jの人なんにも考へてなかつたのか…?

「西園寺」

「は、はい？」

「それを決めるのは俺じやない。いつかは「れがきつと役に立つ日
が来るだろう。

だから今田の感覚を忘れるんじやないぞ」

「は、はあ…」

「それじゃあな」

スタスター…

本当になんにも考へてなかつたようだ。
しょうがない、俺もそろそろ寮に戻らうかな…ん? あれば?

ブンツー! ブンツー!

「ん? どうした? 西園寺。俺の素振りなんか見て楽しいのか?」

「いや、そういう訳じやないけど。もつそろそろ練習の時間終わり
だぞ、越後」

「俺はもう少し練習するぜ。早く上手くなりたいからな。どうだ?
一緒にやらなさいか?」

「うーん…」

正直疲れてるけど…Jのこいつといひで頑張ってるからJにつけ野球
うまこのかな。

「俺もやうせてもひつよ。早く上手くなりたいからな。」

「やれやれだぜ」

「なんで俺今やれやれって言われたんだ？」

「まあ、いいからやるわ！」

なんなんだか…

今、俺はマウンドに立つてゐる。

俺は球を投げる。越後がバットを振る。そのバットは球の少し下を行き、空を振った。

なまじうつこいつと云なつてゐるかといひ、始まりは越後のこの言葉
だった。

「俺と一打席勝負しないか？」

この言葉に俺はYESと答え、コイツと勝負することになった。

俺は一球目を投げる。球は大きく外にいった。

（やつぱりこれくらいじゃ振つてくれないか：）

俺の持ち球は140km前半のストレートとスライダー、決め球のカーブだ。

正直に言うと、中学の時に他の学校から推薦が来ていって、投球には自信がある。

推薦蹴つて、この親切学校にはいったんだけど。

1ストライク1ボール：

俺は三球目を投げる。今までのストレーントは違い、少しスピードを緩めたカーブだ。

「くつ…」

越後はタイミングがずれたようだ、またもバットは空を振った。

「さすがだな、西園寺…けど…勝つのは俺だ…」

四球目、五球目と投げる、が全てストライクゾーンには入らなかつた。

2ストライク3ボール…！

「これでラストだな…越後…！」

投げる。もちろん、ど真ん中直球だ。越後はそれを捉えた。

が、当たり所が悪かったようだ。

打った球は真上に飛んで、落ちてきた。

「キャッチャーフライ（捕飛）だな。この勝負はお前の勝ちか… や
れやれだぜ。俺ももつと練習しなく
ちな」

「勝つたからボテチくらこは奢ってくれよ~」

「う… やれやれだぜ」

購買に行つたらポテチが売り切れてた。

越後が代わりに買つてきたお菓子は非常に辛いお菓子だった。

あいつは口をつぶつて買つてたから選んで買つたわけじゃ無いんだ
が…

俺が辛いの苦手と知つていたのか？ 嫌がらせだろこれ…

あのお菓子は畠田にあげた。そしたらいきなり一氣食いした。すげえ。

第7話 「緑の髪の女の子＝トラブルメーカー？」

今、俺は屋上に向かつて歩いている。
あそこは人が来ないし、風も気持ちいいし、休むのにうつてつけなんだよなあ。

今日は基宗さんがキャプテンになつてから数日後だ。

「はあ……疲れた……ん？ 前も言つてなかつたか？」

そして、ここに来てまずやることは一つ。あの人の影いたりしないかな…と見ることだ。

「いたよ！」

あの森の人影は緑色の髪の女子だったのか…ん、どんどん森の奥に進んでいくな。今日は練習休みだし…ついていつてみるか。

「では、いってきますよ」

ガチャガチャ、バタン

ふうふ。この森の奥に旧校舎があつたのか。

アイツはこの旧校舎の裏にある扉を通して出て行っちゃつたけど…

「たぶんこれ、外につながつてゐるだろ? なあ…確かめてみるか」

扉のドアノブに手をかけて、回す。

あ、あれ? 回らないぞ?

「これ、カギかかつてるー?」

え、じゃあアイツどうやつてここに通りつたんだ?

まさか、この学校の理事長の娘で、このカギを持つてたとか…
いや、それだつたら正門からですか。

「どうしようか…」

けどまあ、アイツも長くとも3時間くらいで帰つてくるよな。
個人的にはボールの恨みもあるから、この扉を開かないよつとして
封印して
やりたいけど…

それじゃこの扉をひきひいて開けたとか聞けないし、何だか面白いやうだ。

「ふいー、疲れたよー。今回ばかりは遠出だつたから、帰つてく
るのにもひと苦労
ですよ。けど今回は大量に買つてしましましたー。これならじざりへ町こ
いかなくともいい
でしょー？」

「おい…」

「え、え、誰！？」

「いつたい何時間待つたと思つてー。もう夕方ださ。帰つてくる
のが遅いんじや
ないか？」

「…」

「にしても、このドアの鍵をお前なんで持つてるんだ？セレヒくん
…ん？」

「これとこの荷物を持って、そこに立つて
「い、こつか？」

カメラで撮られた。

「え？」

「はい、証拠写真。これであなたも共犯者ですよ」

ちよ、おまー？しかもドアの位置がいつの間にか俺の後ろに！？

「私の写真は無いのでむしろ首謀者として扱われるかも」

「ひ、ひでえ～」「

「では、手に持ったものを返してみる」

「は、はい」

「私は高科奈桜。なお皆からはナオって呼ばれます。あなたは？」

「西園寺…」

「西園寺君ですね、覚えましたよー・よろしくねー・」

「あ、ああ

「じゃあ、失礼します！」

スタスター…

も、もしかして俺はとんでもないやつと知り合になってしまったんではないのか？

よろしくって、何なんだ？何をだ？

.....

「むついい、帰れりつ…」

「ああ…」
「どうしたんだやんすか？」
「いや、少し前になんかとんでもないやつと知り合ってしまつたんだ」
「それって誰でやんす？越後でやんすか？」
「いや、越後もとんでもないけど、越後じやなこよ」
「あ、いいかでやんす。それじゃあ先にグラウンドに行つてやんすよ」
「ああ

ホントにあいつはなんだったんだ?今度また聞いただくなへりゃならないな。

会えたらだけど。

「西園寺、先に行つてゐるぜー。」

「ああ、越後」

「西園寺君ー先に行つてますよー。」

「ああ、田嶋」

なんでもみんな俺に声をかけるんだ?

「西園寺君ー先に行つてますよー。」

「分かつた、つてちよつと待てー!」

ガシツ

「アウツー!」

「高科、なんでお前がここにこるんだ?」

「ここは廊下ですよ。生徒がいても問題はありませんです」

「いや、問題だらけだからな。女子生徒がここにこるのはおかしいからな」

「いやー、堂々としてればバレないもんだねー

なんでここにこるんだ?」

「そればせうと、なんでここにこるんだ?」

「男子校舎の中は女子生徒も興味津津ですからね。そんな彼女達に真実を提供するため、

正々堂々こいつそり忍びこんでるわけですよ

「正々堂々と、こいつそりつて言葉は普通同時に使わないからな」

「それで、西園寺君は私の味方ですか？それとも敵ですか？」

いや、敵にきまつてるだろ。

「俺がトラブルメーカーの味方をしたところで何か俺に得があるのか？」

「むむつ敵なんだ！ならばこひはあなたにも共犯になつてもうう必要があります！」

はつ？

ガシッ！

「おい、俺は練習があるんだ！離せ！」

「いえいえ、こんな面白い事は他人と共有しなくてはいけませんから」

「お前は何をいっているんだ！？」

スタタタタタ…

やばい、練習に遅れてしまう…あ、あれは大河内先生！

「おい、お前ら廊下を走る…女子生徒？そこの一入止まれ！」

スタタタタタ…

「そんなこと言われて止まる西園寺ではないのですよー」

「俺の名前を出すな！」

「なに、西園寺だと…」

「違います、先生誤解です…」

本気でやばいと思ひながら高科を見ると…ワックスを持っていた。

「ワックスアタック！」

「うわ、こいつワックスぶちまけやがった！」

「ぐわつ…」

ツルッ！

「せ、先生えー！」

「あはははははは…」

「笑つてる場合じゃない！俺を巻き添えにするな…」

「あはははははは！次行つてみよーー！」

「行くなあーー！」

もちろんこの後怒られました。なぜか俺だけ。高科は逃げ切った。

くわ…あいつめ…今度会つたら覚えてろよ…

第8話 「やつしょ場所が「ひりひり」変わるから題名付けて」

「おー、西園寺」

「はい、何ですか監督？」

「少し他の学校に行つて偵察にいってくれ」

「はい、分かりました。」

とこうじで、俺は今、荷田君と他の学校の偵察に行つている。
もちろん偵察というのさ、相手の野球部のHースとかの弱点を探つ
たりすることだ。

「ホントにバスで片道1時間は長いでやんすね
「ハリハリして交通は不便だよな」

どうでもいい話をしながら他の学校を見学しに行く。
にしても久しぶりに外に出て見たら全く知らない製品とかニユース
が流れてる。

…たつたの数カ月で町つて変わるんだなあ。

「おお、これは最新版のアニメのフイギュアでやんすー早速買つで
やんすー…」

「…」

荷田君は楽しそうだ。

近くの栽培高校や、タクシー高校などの情報を分析する。

けつじゅめんせうせいな。

にしてもタクシー高校か。レーシングの授業とかあるみたいだけど、なんか楽しそうだな。

「おこりもやつてみたいでやんす！」

「どうあえず一通りの学校の偵察終わったな」「おいら、少し買いたいものがあるから少し寄つていいでやんすか？」

「だめだよ、一本バスに乗るのが遅れたら次のバスまで時間がかかるから」

「仕方ないでやんすね…ん？奥から来るのは…天道じゃないでやんすか？」

確かに天道だ。しかも彼女を連れている。なんともムカツクやつだ。

「…よつ」

「うん？誰、君たち？」

「…お前の敵だ。前戦った親切高校の生徒だよ」

「覚えてないなあ。最近結構試合したし」

「俺は試合に出てなかつたからな。俺は西園寺 卓弥だ、覚えておけ！」

「そんなライバル宣言されても。俺そういう事何回もされたるからいちいち覚えられないとだよ。」

「ねえ、天道君。もういきましょ？」

「ああ、そうだな若菜。それじゃまたいつか、新月高校の人！」

スタスター…

「…新月高校じゃなくて親切高校でやんす。隣にいたのは彼女でやんすよね？羨ましいでやんす…」

「あいつ、甲子園に出るのに『アーティト』といい御身分だな」「ホントでやんす！」

そうして、俺達はまた歩き出す。

まあ、そうしてバスに乗ったんだけど…

「なんでお前がここにいるんだよ！」

「まあまあ、いいじゃないですか。ナオっちも少し外に出でたんですよ」

高科の奴が一緒に乗つてやがった。

「せういえば、お前ってなんであそこの鍵を持つてるんだ？」

「あそこってあの旧校舎の扉のことですか？」

「うん。やっぱりあそこ旧校舎だったのか…」

「まあ旧校舎のことはまた次回話すとしましてですね、あの扉はナオっちが偶然見つけた物なんです。」

「偶然？」

「うん。 じいじが偶然あんな扉を見つけたのか。 なんとも運がいい奴あれ？ それでもあの鍵のことば説明がつかないぞ？」

「うん。あの扉は偶然見つけたんですよ。扉の鍵が腐つてて普通に通れたので、ナオっちが新しく鍵をつけなおしました。」

「つけなおした？」

「やうじよ。自作ですよ?『工作が上手いんだな、ナオ』って言ってくれてもいい

「アガル」

「相棒が使いたいっていうなら貸してあげてもいいですよ」
「誰が相棒だ…」

勝手にこんなトラブルメーカーの相棒にされてたまるか。

「庶民權かに使つては國體にあらず!!

「なぜ喜びながら這いつ？ そういえばお前は何部なんだ？」

新聞? うひて運動部じゃなことこけなこせやじや…
そのじとを描描するとい

「そんなことまだつこだつてなるんですよー。」

堂々と言われた。

まあ、アーヴィングの話がしねじめにいたので、高科と別れた。

数日後。

「夏の甲子園一回戦、星英高校勝ちました！」

テレビです。

「ちっ、やっぱあいつ強えな」

「そりゃそうでやんす。あつちは超高校生球のピッチャーでやんすからね」

宮取と荷田が話す。

あいつ…そのまま甲子園優勝とかしないよな？

「そりゃあれば高科、お前天道相手にライバル宣言したんだろ？」

「え、田島、誰からそれを？」

「おいらでやんす！」

荷田君……口軽いな。

「当たり前だろ！あっちが超高校生だからと言つて、相手は同じ人間なんだ。戦う前から

“…………”

「…すげえなお前。けど、お前の面つらとせもつともだ。よし、俺も今日から

天道のライバルだ！」

「俺も俺も！」

「田島に越後…」

（なんか俺が天道に認められたライバルってことになってるけど…
まあいいか）

部屋にて。

「ハア～」

「どうしたの、荷田君？」

「いや、一回外に出るといこうと買いたいものが増えるでやんす

「例えば？」

「この本を見てくれでやんす」

そういうつて本を見せられた。

「あ、これは知ってるぞ！ ガンダーロボだろ？ あれ、けど、なんか少しちがくないか？」

「これはガンダーロボはガンダーロボでやんすけど、ダイナミック
ガンダーロボなんで

やんす！」

そこでやんす！普通のカンジターロボと違つてまう

「うー、後次ノハモツヅルシナア、カグマニコラガムシナア」

「アーティストの死」

なんだそれ。それは始めて聞いたぞ？

「ウダマーボリっていつのま、~~~~~」

「も、もう分かつた、分かつたから勘弁してくれ！」

なんだ
も「いしんてやんすか?」
からか樂しいと「N」なのに

10

お俺は男は決してないんだが……

支那の歴史と文化

「^!?

ダレカタスケテクレ――――――!

第9話 「大江と神条」

特にやる「」ことがないから森を「」つらつらと歩いていた。
ホントはここで自主練習とかやるべきなんだろ? カビ、なんかやる
気になれないしな。

「うん、空気がおいしい」

学校の中といえ、ここは森。

空気がおいしいことに変わりはない。

最近は高科のやつに振りまわされていたからな。

「…あいつ狙ってやつてるんだじゃないか?」

気のせいだらうとは思うけど数が数。

バスの中で会えば、男子校舎の中でも会う。

あれ以外にもなぜかあいつは野球部の部室で会つたりした。

しかも今の所100%の確率で最後に大河内先生が来ることになる。

「トラブルメーカーが自分でトラブルを引き寄せているんだか」

そういうえばここいら辺つて大江のいた場所の近くだつたな。
ちょっと寄つてみてもいいかな… いるかどうか分からぬけど。

テクテク…

「？」

おかしい、急に警備犬がこなくなつたぞ？

「キャウン、キャウン！」

！

犬の鳴き声だ！

何事かと思い、鳴き声のした所に向かつと、

「おまえ新入りやろ？まだウチに向かつてるのは一〇〇年早いわ
！」

犬の足を持つている大江と、足を持たれて空中で宙ぶらりんになつてゐる犬がいた。

そして大江と目があつた。

「…」
「…」
「キャウン！」

どいつじょへ。

ものすゞく氣まづい。こんな時どうすればいいんだ？

親や学校からこんな時どいつじょと齧わなかつたぞ。

おい、学校。これからひやんといいつこいつ時の対応法を教える。

「や、やあ大江。」機嫌麗しゅうつ…

「あ、あはは…」

「キヤウン！」

「ど、どりあえずその犬を、離したら、どう、ですか？」

なんか敬語になつてしまつた。

「あ、う、うん」

パツ

急いで犬が逃げる。さすがにあれは警備犬も逃げるな…

「お前、普段からこんなことしてるとか？」

「いや、そういうわけじゃないんやけど…」

「ふーん…」

「そ、それはそうと、今日ほんとに向しに来たん？まさかウチに余
いに来てくれたん？」

「まあそつこいことにしてくれよ」

「あはは、嘘でもこつてくれるとつれしいなあ。けど、そんなこと
言つたら彼女悲し
むで？」

「俺彼女いないんだけど」

いたら他の人に血漬じてるし。

「えーっ、こないん?なんだ、いると思つたわ」

「どうせどうみてそう思つたんだ?」

「いや、なんとなくやナビ…なんかいそうやつたから」

彼女いない歴=年齢ツス。

「で、ここにきててくれたのはいこなび、なにもあることなことで?」

「いや、単に空氣とか吸いに来ただけだから」

「あ、そんなん?まあ確かに空氣はおいしけど…警備員さんとかに見つかるリスクとか

考えてないん?」

「やつこいつ詰じやないんだけどな

まあ確かにここにくるまでに何回も見つかりかけたけど。

「それに、ウチ、実はな。こいつもここに来てることばれてて、たまに自治会が

やつてくんねん

「自治会?」

「あれ、あんた知らんの?」

「教室にいるときほほとんど寝て聞いてないんだ」

「まあ、簡単にこいつと、風紀の取り締まりつちゅーひとやな

そんのがいたのか。

「やつこいつは普段白い制服着てるから…分かった?」

ああ、あこづらか。あのこちこちにころなことに注意していく奴ら

か。

あいつらが何で一回かりたくなつたんだけ... セツコ「」とか。
ん? あれも自治会の奴らかな?

「なあ、大江?」

「ん、なんや?」

「あれ自治会じゃないのか?」

「ん...! あれ紫杏やないか! あんた、あつちで隠れとけ!」

「お、おひ!」

急いで隠れる。紫杏? いつたいどんなやつなんだ?

スタスタ...

「や、やあ紫杏」

「またいるのかカズ。あんまり」に来るなといつてんだろ?」

あいつカズって呼ばれているんだな。

「でも校舎で身体振りまわしたら怒られるし...」

「それは絶対やらないといけないのか?」

「いや、そうじゃないんやけどさ...」

「まあいい。それよつさつき男子生徒が」にまぎれていなかつた
か?」

「い、いや、気のせいぢやうん?」

「せうか、それならいいんだ。それじやあ私はもういくぞ。あと、
その男子生徒。

お前もあんまりここに来るんじゃない。たまたま見逃してると、次
はないぞ」

バレてんのかい。

「紫杏行つたからもう出でてもいいと黙つで?」

「…見つかってたからあんまし意味無いと思つけどな」

「けど顔はハツキリと見られてないから、まだいんやない?」

そ、そういうものか?ハツキリ見られなかつたらセーフつて…

「とりあえずあの紫杏つてやつは何者なんだ?」

「紫杏のこと?アイツは生徒会のトップやつとるんや。男女で校舎が別れてるから、女子の生徒会トップハヒことになるな。ウチらと同じ一年や。あ、そういえばアンタにまだ私のこと一年つて言つてなかつたっけ?」

「そうじえば言つてなかつたな。雰囲気でだいたい分かつたけど。この身長を生かしてバスケとかバレーすればいいのに。いや、すでにもう勧誘されて入つてるか?」

「それで、本名は神条 紫杏。私の数少ない友達や」

「お前あんな堅物そなのが友達なのか。見た目でいつたらアイツの方が友達少なさうな気がするけどな!」

「それ、私の前で言つた?実はウチ、そんな氣い長い方じやないね

んで? 「

「す、すまん」

「ええ、ええよ。武術やつてて185cm、そんな奴の脅しは怖
かかる。

「まあえけどな。紫杏が生徒会に入った時、作業をするときに力
仕事をする人が
いないのに気づいたらしくんや。それまでは先生がやつてくれた
らしきんやけど、

それじゃダメだと紫杏が言つたらしくて、私が手伝つてになつた
んや」「

「その時に仲良くなつた、つて事だな」

「いや、その前から森で知り合つてはいた
「で、生徒会の関係で仲良くなつた、と」

「わづこひ」と

森での出会いから発達した友情…なんだそりや。

「あと、お前つてそんなに友達少ないの? いつして話してる分には
そんな友達が少ない

ように思えないんだが」

「いやあ、この身長といつもはつちやけてるせいか、あんまり女子
とは仲良くなくて。

でも、男子とはホントは話すの苦手なんや」

そうなのか? いつして話してると普通に見えるんだが…

実はホントの一番の友達は警備犬…ゲフングフン、こんなこと考
てるのがバレたら

大変なことになりそうだからやめておいつ。

「で、なんで男子が苦手なんだ？」

「え…それ言わなくちゃあかん?」

「いや、別に言いたくなかったらいいんだけどな。ただ的好奇心だよ」

「好奇心は猫を殺すつて言葉、知らんの?」

「そこで使う言葉なのか、それ!?」

え、なに、俺殺されるの? ゆっくりしんでいつてね、つてことなの!? 僕!?

「まあそれは冗談としてな」

「冗談にしてはタチが悪いぞ…」

「ならアメリカンジョーク」

「言葉を換えても意味が変わらなかつたら一緒にだろ!」

「まあええからええから。実はウチ、昔武装した高校生数人に襲われたことがあるんや。

生意気だからって。それで大怪我して、一年間入院。これでも、あんたより一年上なんや
で?」

「そ、そんなことがあつたのか…」

あつと中学生で女不良集団のトシップとかだつたんだろうな。うん、
そうにちがいない。

「あ、いつとくけじウチが小6の頃の話やからな?」

「…」

ちょ、ちょつとここつに対する考え方を改めないといけないようだ。
そんなに怖いやつだったのか。まあ…普通に話してる時はただの面

白いやつなんだけど。

「あ、それじゃあウチ桧垣先生に呼ばれてたから行くわ」

「え、桧垣先生って男子の方の先生なのか？」

「さすがに先生は男女共通やから…」

「そうだったのか…」

「それじゃあ、ウチもういくわ」

「ああ」

桧垣先生ねえ…ん? なんで怪我もしていない大江が呼ばれるんだ?
やつぱり超能力者…そんなことはないな。

第10話 「記者」

今日も森にやつてきた。

昨日、大江と別れるとき、「明日せむチリリヌルをで」と、書つてたので、

俺が森を「つりつ」理由は別にある。

それじゃあなんで俺が森を「つりつ」しているのか。

もちろん女子寮ではなく、外に出るためだ。中じゅう暇なので。

テクテク…

獣道を歩く。じぱいへ歩くと、壁が見えた。

「うわ、やっぱ高いか…」

壁にたどりついた俺は、その壁を見上げた。
うん、やっぱ高いな。3回は軽くあるかな?

…え? なんで高科の作った扉を使わないか、だつて?
や、なんか女子が作った物を使ったら男子として負けかな~と。
やっぱり自分の力でやらなくちゃね。

で、まあ本題に戻るけど、ロープとかいろいろ持つてきたから、
なんとか登れそうだけど…
ああ、なんとかいけそうだ。

「おお、外に出れたぞ！」

まあ実際こんなことしなくても偵察とかで外出はできるけど。
今回は完璧フリーだからな。

おっ、大声を出したらせつから出れたのに警備員さんに見つかってしまった。

一応、周りを見て：

11

やばい。外国人っぽい方にめちゃくちゃ見られてる。

位は越後。

「あ、はい…」
「…もしもし、アナタ、この学校の生徒ですか？」

よかつた、日本語喋れるんだ。しかも発音も上手いし。

「Wow!」」れはラッキーです。私、フリーの記者で、竹内ミーナ、いいます。

この学校を調べたくて、ここに来たんですが…入させてくれなくて困つてたんですね。

：協力してくれますか？」

こ、こういう時協力しなかつたらマズくなるような…
けど、こういうときって法律的に大丈夫なのか？

「車で町まで送つてあげますよ?」

「んでこんじゅう」

移動手段は必要だもんね。

え、法律? なにそれ、おいしいの?

「それじゃあ」の車に乗つてトマト

一
はい

「私、悪い人にみえますか？」

いや、全く見えないけど。むしろ天然つて感じがするな。いや、猫を被つてるだけとか？

「まあ、いいか。俺は西園寺 卓弥。親切高校一年です」

「それじゃあ一つだけ質問します。…あ、簡単な質問ですよ？」

「え、一つ？」

「ハイ」

一体この人は何しに来たんだ？…たつたのひとつで意味あるのかな？それに俺が答えられるかどうかも分からないのに。

「「」の学校をどう思いますか？」

「ずいぶんとアバウトだな。

「ずいぶんとアバウトですね」

おっと、声に出してしまった。

「なら、もう少し具体的に。「」の学校での生活は楽しいですか？もし、困つてることどうあつたら聞かせて下さい」

田島の暗い顔や、越後のあた…ゲフンゲフン、うん、学校のことだつたな。

「特には無いんですけど…」

「本当にですか？」

な、なんかこいつ、本当にへって言わされたら怖いな。

「い、いや…あ、そうだー交通の便が悪いのと、情報が外から中々入つてこないことが

ちょっと」

「それだけですか？」

「まだ！？」

「ま、まあこれくらいです」

「そうですか、ご協力感謝します」

「そ、それだけでいいんですか？」

「ハイ」

なんだ、もつと学校の細かいことここまで聞かれると思つたんだけど。

「そういうえば、なんでこの親切高校のことを取り材してるんですか？」

「取材、とは違うんですけど、実は事件がありまして」

「じ、事件…？」

「そんなのあつたつけ？」

もしあつたら、俺ら知らされてるんじゃないのか？

「まあ、時間が少ないので細かいことは言えませんが…」この学校、おかしい、思いませんか？」

「え、どこが？」

特に不自由はないんだが。あ、男子寮と女子寮が別々になつてると

「…」

「…氣づきませんか… わたしも、情報量が少ない、言つてしましましたよね？」

「あ、はい」

「実は情報が外に来るのも少ないんです。確かに、学校のホームページや、政府に送っている情報は正しいんですが… 必要最低限のものしか送つていなんです」

「…そ、それって…どうこう」とだ？

分数のかけ算が理解できない俺にとって、これは理解しにくいぞ。

「だから私が一部調べたんですが、この学校、内部におかしい空間があるんですよ。しかも、普通は行けないような所に。」

「…」

「しかもこの学校、町と遠いせいであまり政府は関心せず、ヘリや船までこれるよう海岸も近くにあつたりする。最近はオオガミとジャジメントといつ会社が戦争とか

していますが、この学校はそれに関わっている可能性があるんです」「えつと…どうこう」とだ？

「それのせいかどうかは分かりませんが、実は5年前位にここで行方不明者がでてるん

です。できればその人たちのリストとかも欲しいんですけど… 西園寺さん、頼めますか？」

そういう所には間違いないそうこうしたリストがあるんですね」「お、俺！？…はい、出来る限りのことならまあ手伝います

なんの話かよく聞いてなかつたが。

「 わうですか。おひとやかわいじやくへんでおひじゆわせましゅう。

それじゅ、

また後日やぢらへ伺います」

「 分かりました」

やつまつて、俺は車を降りた。

…何の話か分からぬけど、まあいい最近の生徒のリストをもうひく
ばいいんだな?
ま、それより今は、

「遊ぶわ―――つ――」

寮に帰つた後、たまたまゲットしたガンダーロボのフイギュアを荷
田君にあげたら

めちゃくちゃ喜んでた。お礼に200ペラくれた。そんないいも

の
だ
つ
た
の
か
な
?

補足1

（補足）

きっと原作とは違うかもしれないけど、そこはあしからず。

野球部関係

主人公…野球の腕はそこそこあるヤツ。ただ、高校に入つてからはゲームをする人の手腕しだい。とにかく頭が悪い。高校生で因数分解が出来ない。

荷田君…野球部の中では頭がいい方。学年でもみると平均的。メガネをかけていて、主人公ととても仲がいい。あと忘れてはいけないのが非常にマニア。

越後…野球部の中で一番バカ。学年でも一番バカ。どうやって入試に合格したかは謎。なぜか野球のルールは細かいところまで覚えている。野球センスは素晴らしい。やれやれだぜ　が口癖。

田島……顔が暗い。頭はいい。野球は上手い。…それくらいしか印象ないなあ。

岩田……いつも腹をすかせている、大きくて馬鹿なヤツ。食べ物をくれる人には誰にでもついていく。パワーがあるから野球では頼りになる。

官取……嘘つき。学力は普通。いいかげん学力で判断するのやめようかな。嘘つきといふか、ほら吹き。ただ、努力家ではあるので実力はある。ていうか一粒一万円の飴つてなんなんだよ…

北乃……先輩1。実家は相当金持ち。ゲーム中ではいろいろ邪魔してくる。布団には落書きするわ、缶を投げてくるわ…、とにかくうざい。

基宗……先輩2。主人公で色々実験してくる。ほんとやめてほしいぜ・・

飯占……先輩3。元キャプテン。名前が「いいじめ」だからどんな性格かは解るはず。

補足2

補足2

第九話までの出てきたキャラまとめ。

主人公…補足1を読め

荷田…補足1を読め

越後…補足1（r y

岩田…（r y

田島、かんど（r y

先輩方（r y

大河内先生…30代後半くらいの熱血教師。主人公たちのことによく見てくれる人気のある教師。主人公たちの担任でもある。

車坂監督…と同じくらいの年なのに、こつちは40後半に見えるルックス。老けてる。相当熱血。

母…主人公の母。…それ以外に説明欲しい？

桧垣先生…変な髪の毛の形をした変人。全てを科学的にみる。恋も

科学的に調べた。他にもいろいろやつたがまだ言つことができない。

大江 和那… 槍が大好きで、ケンカしたら大の男3人くらいには勝てる。3年生には身長が伸びて、190になっちゃうよ。ちなみにパワポケ10以降の作品では普通の軍隊に勝てるほど強くなっている。

神条 紫杏… 頭も賢く、判断力もあるが、予想外の事態には弱い。このようなことから大物になるのだが…俺の作品ではどうなることやら。登場回数がふえたらしいね。しあーんと調べると結構件数がある。

高科 奈桜… スーパートラブルメーカー。自分でトラブルを作り、引き寄せる。常に落ち着きが無く、好奇心を携帯して。緑色の髪だが、パワポケでは普通。結構俺の好きなキャラ。こいつの登場回数は増えるだろう。にしても名前読みづらいよね。最初何て読むか分からなかつた。

食堂のおばちゃん… 登場回数はたぶんこの作品では1回だけ。

天道… 超高校生級の最強ピッチャー。最高球速Max162キロ。それ、日本最高記録じゃないの？監督は変化球は曲がらない、とか言つても、3球種も投げれるから。そもそも打撃センスだけでもヤバイから。本名は天道 翔馬。（テンドウ ショウマ）

の彼女… 本名は御室 若菜。かなりの美形。今の所はこの説明だけでいいや。

みむろ

わかな

第1-1話 「俺と悪夢の練習」

とつあえず、ミーナちゃんは生徒のリストがほしにって言つてたけど…

一体どうしたらいいか俺には見当がつかないな。

校長にでも頼んでみるか？まあ無理だろうけど。

「おい、西園寺。練習行こうぜ！」

「ああ分かった。今行くよ」

またあとで考えるか。別に今じゃなくてもいいわけだし。

「あの…」
「ん、何だ？」
「またあの練習をやるんですか？」
「いや、やる内容は別だ」

また俺はキャプテンと一緒に練習をする羽目になつてこる。

……今度はひやんと考えてこるよな？

「今日は他の学校の練習メニューを参考にしてみた」

「あ、それなら大丈夫ですね」

「ああ、ぬかりはない」

なんだ、まともねうじじゃないか。

前言撤回。どうしてこうなった。

まず、手首におもりが入ったリストバンド。

足にタイヤをつけて手にいろいろ持たされている。

「それからうわさ飛びでグラウンドを回るんだ」

「本気で言つてますか」

「あたりまえだろう」

本気で何考えてんだ。

「あの……」れつて本当に他の学校の奴を参考にしたんですね？

「ああ、もういるんだ。まあ一部はそのまま採用をせよむりつたがな

全部だる。」
れ絶対全部だる。 とつあえずやるしかないのかなあ
つてなんか
音が聞こえないか?

グルルルルルル……

この森でよく聞くまるで警備犬のよつた声……

「あと、俺のアレンジも一つ加えさせてもらつたぞ」「ま、間違いなく先輩のアレンジってあれですよね?」「ああ、知らんな。それじやあ始めるぞ」「え、ちよ、知らんنつて!それに始めるつていわれてもまだ準備
が」「もつ犬が追いかけてきてるが?」

「い、いんなの

「無理だあああああーーー。」

「あ、こらーーちゃんといつぞ飛びで、持つてる物を離すなー。」

むちやを訴つたなーあ、もつ犬がそりに……

「少しお前には厳しかつたか」

「あんなの誰にでも無理ですよ」

「わつか? 越後あたりなら普通にこなしそうだが

俺と越後をいつしょにするな。

それに越後でも無理だつ。無論、頭脳的な意味で。

「それじゃあ、こいつの練習法も試しておくか」

「え、まだあつたんですか?」

(こ)の人ホントに暇人なんだなあ……)

「キャプテン、西園寺君がキャプテンのことと暇人だと思つてゐる
やんす!」

「わあ、荷田君一体どこから來たんだ!」

「……荷田、それは本当か?」

「本当にやんす! オイラは西園寺君の考へてることが分かるんでや
んす!」

「西園寺……」

「そんなことは考へてません! 荷田君が勝手に考へておられるだけで
す!」

思つてはいたけど… そんなこと言へるわけないだろ?。

「なり確かめるか。ここに × が書かれているカードがある。

西園寺に引いてもらひながら荷田は何を引いたか当ててくれ

「分かりましたーでやんす

いや、さすがに荷田君でも無理だな。しかもだんだん練習関係なくなつてゐるし……

まあいいか、これを引いて……あれ? 「?」?

(キャプテ
(雪つかなよ?)

? じ。なんかセレーニカ? こんなのが分かるわけ…

「キャプテンもひどいでやんすね。ひいたのは? のカードでやんす!」

「せつ、俺がよく他のカードを渡した」と云つたな
「相手が西園寺君でやんすからね」

結果・俺の弱点= 荷田君。

「つまり西園寺は俺を暇人と思っていたわけだな?」

「うつーそ、それはそうかもしねないですけど……そつだー早く新しい練習を

試しましょ!」

「話を逸らしたな」

「話を逸らしたでやんすね

グッ……

「それじゃあおこりは練習もじるでやんす」

「ああ、しかつてやれよ。……西園寺」

「は、はこつー」

「さっきの件は後で話す。それじゃあ次の練習はこのイヤホンをつけてくれ。」

「これですか？」

得になんにも聞こえないぞ？いや、なにか聞こえて

(お前は野球が上手くなる)

(お前は野球がとても上手くなる)

な、なんだ？一体何なんだこれは？

(お前の周りはライバルだ！)

(お前は野球の練習がしたくなる！)

や、やばい。半分洗脳じゃないのかこれ！？

(お前は～)

(お前は～)

(お前は～！)

(お前は～！)

こ、これ以上はマズイ！

そう思つて俺はイヤホンをはずした。

「あ、まだ終わっていないのにイヤホンをはずしてはダメだろ」

「これって洗脳じゃないですか！」

「何言つてる。これは俺が考えた練習法、催眠式の気合注入法だ」「催眠式の時点でダメじゃないですか」

なんでこの人はいつもこうとしかできないんだらうか…

もつともとみな練習は考えれないのか？

「とつあえず今日はもう帰りますよー。疲れたし」

「ああ、練習はもつ終わっていいぞ。練習はな
「練習は？」

「そうだ。次はなぜお前が俺を暇人と思っていたかを小一時間聞く
必要がある。

さあこい」

え、ちょっと……やっぱ怒られる」とになるのが……

薄暗い部屋の中、キャプテンと一緒につい話をした。とても怖かつた。

第1-2話 「屋上での出来事」

「せんと。屋上に行つてみるか

最近俺は屋上に行つて身体を休めることが日課となつていて。
なんてつたつて風が気持ちいいし……ん?

「また高科のやつ来てるのか」

どれ、ちょっと会こに行つてやるか。
別に暇だし。

「つて、あれ?」

アイツどり行つた? 少し田を離したすき! ……

「誰かをお探しですか?」

「ああ。常にカメラとトラブルを携帯していて、落ち着きのない女
の子を探して

いるんだ。しかも男子校舎で、だ」

「そんな人居るわけないじゃないですか。少し熱もあるんじゃな
いですか?」

「田の前にいるだろ? -お前だお前! -

「私の場合は + 好奇心ですよ」

あ、トラブルを常に携帯していることは認めるのか。
にしても、ここにどうやつてここに来たんだ?
わざわざまでトにいたのこものすぐ速いな。

「ふつふつふ。ナオっちがここにこんなに速くきた」とびっくりしてるかもしだ

ませんが、ナオっちの隠密術をなめてはいけませんよ」

「なんでだ?」

「実は昔に出会ったプロの情報屋のお姉さんに教えてもらったのです。『ふふふ、筋

がいいわね、ナオ』と言われましたよ」

だれだ、こいつにこんなややこしいのを教えたのは……

「あ、あそこにそのお姉さんがいますよ!」

「ハア!?」

あ、あの金髪でコートを着た人か?ってか、そもそもなんで学校にいるんだ。不法侵入だろ。

「あのお姉さんすいいんすよ。とってもケンカが強いんです。私の目の前で

暴走族を一人で倒してましたよ。素手で」

「それ、本当に人間か?……って、あれ?さっきの人どこにいったんだ?」

「後ろにいるわよ」

え?……と思いながら後ろを見たら

そこには金髪の人気がいなかつた。

あれ？さつきの声は高科……でもなく、俺の知り合いにもそんな声の奴はない。

「私はれっきとした人間よ。素手で暴走族を倒したからって人外扱いしないで欲しいわね」

「だ、誰だ！？」

「だから、そのお姉さんですよ」

今度も後ろから声が聞こえてきた。
後ろを振り向くと

やつぱりいなかつた。

「ど、どこのんだ？」

「だからどこのじやないですか」

「ナオの話通りよ。私はここにいるわ」

高科にはどこのか分かるひじい。

いや、ホントにどじい？

「しようがないわね、そろそろ姿を見せてあげるわ」

そうこうで、お姉さんと呼ばれる人物は俺の後ろからでてきた。

いやいや、その方向をつき俺が向いていた方向ですか？
どうからでてきたんですか？

「単にあなたが振り向くと同時に反対側に移動しただけよ」

「だからそこにいるってじつたじやないです。何を聞いてたんで
すか、西園寺君は？」

ああ、なるほどー……つて、なるかあーつていつたら、隠密術って
言われるの
分かつてゐるけど……

「にしても、この男はあの男と雰囲気が非常に似ているわね」

「あの男って……お姉さん彼氏いたんですかー？」

「違つわよ。確かに好きではあつたけど、仕事の時の固定客だった男よ」

「その人なんで俺が雰囲気似てるんですか？えーと……」

「お姉さんでいいわよ」

「お、お姉さん？」

なんか呼びにくくな。それにこの人年齢いくつ……。

「ハハハ……」

「人の年齢を探るのはやめた方がいいわよ？」

「は、はいっ！」

「それで質問の答えなんだけど。そんなこと言われても私は分から
ないわ。

ただ、野球をやっててバカっぽいところが似てるからかしら。」「
人をバカっぽいとは失礼な……」

まあ実際馬鹿だからしじうがないんだけど。

「まああなたはデータで見たところ粗鈍馬鹿だつたけどね」

「なぜ知ってる！？」

「ナオから聞いたでしょ。私は情報屋よ。いろんなことを知つて
いるわ。」

じょ、情報屋つてこわいな。みんなこんなのか？
むしろこんなことができるなら政府のスパイでもやりやあいいのに。

「それで、お姉さん？」

「なに、ナオ？」

「お姉さんはなんでここに来たんですか？」

「それはもちろん仕事よ。」
「それで調べて欲しいことがあるって言わ
れたからね。

まあもう終わつたけど

「そつなんですか」

……そだーこの人にミーナさんが言つてた情報を頼めばいいんじ
やないか？

もしかしたらお金がかかるかもしれないけどさ。

「あ、お、お姉さ　」

「お姉さんならもう行つちゃいましたよ？」

「え？」

撤退するのはやつ！

そ、そういうばこ屋上だよな？　あの人どつから帰つたんだ？
まさか、飛び降りた……とか。

「それにしても、なんで高科はここに来たんだ？」

「下から西園寺君が見えたので。それと……屋上からの景色からを
見たかったので」

屋上？上からの眺めを見たかつたつてことか？

「それで、こつから見て分かつたことがあります。この学園にはま
だナオつちが知らない
ことがいっぱいあることが分かりました」

「そつか。でも……ここは男子校舍つて事を忘れるなよ」

何度言つても入つてきそつだけどなあ。
先生たちもさぞ苦労してるだろう。

「そういえば、外に行つてるのはですね」

「まだ何も聞いてないぞ」

「あれ、聞くんじゃないんですか?」

……やうこひことにしつくか。

「まさか図星ですか?かわいいですね」

「つ、つるとい」

「それでですね、外に行つてるのはただ買い物に行つてるのはだけです
よ」

買い物? そんなの購買でいくらでもできるだろ。アリ。

そこまで面倒なことをしてまで外に買い物に行くのか。

「購買部にもいろいろあるけど、やっぱり外の方が品数が多いし、
新商品とかもあるから。」

それらを買つてきて、寮の監にあげるんですよ。」

「じづかい稼ぎか?」

「違いますよ。寮の監にあげたら、生活が華やかになりますから
「華やか?」

「はー。周りが楽しかったら自分も樂しくなるでしょ?だからあた
しが楽しい空間を作り出してるだけですよ」

ふーん。これで扉と鍵のことについて、高科の理由も聞いたからだ
いたい全部
聞いたことになるかな。

「どうした？」

高科が周りを見回していたから聞いてみた。

「そろそろあの先生が来るころかと」

「大河内先生が来るのは決定事項なのか？」

「いや、いつもくるから」

まさかそんなわけ

テクテク……

あちやつたよ。しょうがない、高科と隠れるか。

「高科！」「ちにじー！」

「えつ？」

ダキッ

(ちょ、ちょっとー?)

(静かにしてるよ。多分大河内先生もすぐビニカに行くと思つから)

テクテク……

(.....)

(こしても本当に来るんだなあ。)

テクテク……

「そろそろ行つたか？お前トラブルメーカーでトラブルを呼ぶ体质なのか？本当に迷惑なヤツ……ん？」

「……」

どうしたんだ？

「おーい、高科？」

「戻る」

え？

「はあ？ちよ、ちよっと？」

「戻ります、それでは」

「あ、ああ」

タタタタタタ……

せっかく上手くのがれたのに帰るのかよ。なんなんだいittたい
けど、なんかビックリした顔してたけど、あれは一体？

第13話 「秋季大会終了後」

「おー、サーード！打球をしつかりとりやがれ！」
「は、はいっ！」

現在、ノックをやつしている。しかもとても強烈なやつだ。
原因は監督がとってもとっても怒つてるからだ。
じゃあなぜ監督が怒つているかを説明しよう。

時間は少し戻つて秋季大会。

俺たちは一回戦を勝つて、二回戦の試合の途中だった。
俺たちは、という言葉を使つたが、やっぱり俺はベンチ外。

「くつそー、こどもを俺がベンチ入りしてやる」

「ハハハ、悪いな西園寺！また俺と田島がベンチ入りで」

「おい、ベンチうるさい！3年がいなくなつたからつてたるみすぎだぞ！」

「す、すいません監督」

「分かつたならいい」

カキーン！カキーン！

「あーあの野郎、俺が田を離したすきに」

「あ、先輩がめつた打ちにされてもやんすー」

平面高校 6・4 親切高校

「おい、格下に負けるとはどうこうことだ……基宗ー。」「はーー……油断、してました」
「お前らには本当に愛想が尽きた。ここで一発お前殴りたいが、俺の拳が痛いだけだ。

だから今から全員ぶつ倒れるまで地獄のノックだ！」

「うつむいた」とある。

「あ……試合に出でない俺までなんでもやられたんだよ。つと、余計なこと考へてたらHマーしきやつた。

「おこ西園寺一なにほーつとしきんだーノッカー、もつとあこつに強いのを浴びせて

やれ！」

「は、はい！」

（「うつや打つ方も大変だぞ……）

「あの試合に負けてからずいぶんと練習が厳しくなったでやんすね」

「仕方ないだろ、あんな負け方したんだから」

「それでやんすかね？おいらにはただのハツ挡たりに見えるでやんす」

「

まあ半分くらいはそうかもしれないけど

とりあえず先輩の洗濯物などを早く片付けないといけないので、ちやつちやと手を動かす。

すると越後が話しかけてきた。

「やういえば知つてるか？星英が秋季大会優勝決めたんだってよ」

「あれつもつそんなん日だつたのか？負けると一気に興味が無くなるな」

「越後も暇なんでやんすね」

「来年にそなえて情報収集だよ。全く、やれやれだぜ」

「そついえば夏の星英高校は準決勝で止まつたらしいな」

「そついえばそつでやすね。まあ負けたのは天道がリリーフで出でくる前に点が

取られたらしこからドヤんすナビ」

こんな話をしながら俺たちは洗濯を終え、寮に帰った。

自室に戻つた俺は暇なので他の部屋に遊びに行つてみる」と云つた。そつこええば、俺つて他の部屋の奴の所に遊びに行つたこと無いな……

とつあえず、越後の部屋に遊びに行くことにした。

「ん、どつじた西園寺。俺に何か用か？」
「いや、ただ遊びに来ただけだよ」
「わうか。……ところでさ」

ん？ いつたい常に野球のことしか考えてないコイツに相談されるだと？

明日は砧でも降つてくるんじやないか。

「お前変なこと考えてないか？」
「い、いや？ 別に考えてないけど」
「おかしいな、荷田から教えてもらつた情報でせひこの時によく変な事を考へてる
つて言つてたんだが……まあいいか、本題に入るぞ」

本題に入るのはいいが、荷田君。お前何教えてんだ。

「何か足が速くなる方法知らないか？」

「足？」

「ああ」

なんで急に足の速さ? ロイシ! そんな足遅い方じゃないだろ。むしろ早かつたはず……

「なんで急にそんな」ときくんだ? お前は十分速いだろ?

「いや、もつと速くなりたいんだよ」

「そうか。うーん……」

といふかそんな方法があつたら俺が逆に知りたいな。
何か無いかな……あ、そうだ!

「お、何かひらめいたか?」

「ああ。これから語尾にシユツーでつけてみたらどうだ?」

「どういうことだよ」

「なんか速そうじゃね?」

普通に考えたら全く意味分からなーいが。さすがの越後もこれは

「やれやれだぜ、シユツー!」

「はやつーもつやつ始めてるー!」

言つた通り越後は語尾にシユツーでつけていた。
そんなので速くなるわけないだろ。

「なんか、足だけじゃなく全てが速くなつた気がするぜ、シコツー。」「気がするだけだろ。……」

「そんなことないぜー。シコツー。せり見て見る、シコツー。身体が軽いぜ、シコツー。」

シコツー。シコツー。つてひるねこ。教えるとじやなかつた。

「あつがとう西園寺、シコツー。これでしまはらく練習させてもらひつか、シコツー。」

そんなので感謝されるとほ、感謝の重要さが減つた気がする。

「わつこー……俺は帰るわ」

「ああ、それじやあな、シコツー。」

部屋から出た後も後ろからシコツー。つて声が聞こえた。
あいつ、本当に馬鹿だな。

後日、ベースランニングのタイムをはかつたのだが、越後は逆に遅くなつたらしく。

なんかシコツー。つていつた回数が少なかつたからとか言つてた。

やつぱ馬鹿だな……あいつ。

第1-4話 「森で迷った……」

とつあえず俺は今、森を歩いている。暇なので、大江にでも会いに行こうかと思つたのだ。ところが、

「あれ？ 今日はいないみたいだな」

そう、いなかつたのである。

「なんだ、今日はいないのか……」

しうがないので、この付近を見渡してみる。しかし、ここは地面が固く、周りの木の葉つっぱがちぎり取られている。

そういえば前に大江が言つてたな。

ここで落ちてくる木の葉をつかみ取る……だったか？いや、握りつぶす？

まあそんなところだらう。そして、この硬い地面は強く踏んだ後だらうな。

すじこ練習を重ねているのが良く解る。

「まあ、ここにいても得にするひと無なし……もう行くか」「ほつ、一体どこに行くんだ？」

大江では無い声が響く。

この声……前にも一回聴いたぞ。確か、

「神条？」

「む？私は名乗った覚えがないのだが。カズと一緒にいた男子生徒

まあ名乗つた感じとか姿も見せてなかつたんだけどさ。
いや、もしかして見られていたのかな？」

「なら一応名乗つとくよ。俺は」

「野球部の二二二だらう？私は監督生だから生徒の名前は知つて
いる。それに

しても、前に私は言わなかつたか？もつこには来るなど」

う。そういうふうに言つてたな。けどそんなことは気付かない。

「私自身は別にいいんだが、ここの女子寮の近く。あまつこには来
ることがある

ば、少し反省してもらわなければな」

「は、反省？」

何を反省するひで言つんだ？あ、テストとか？

「まあ仮の顔も二度までとこづからな。ここは見逃してやるべ。…
…にしても君も

不幸だな。私はあの日以来ここに来てなかつたところのこ、君とま
た遭遇したからな」

「なにい、じゃあお前は毎回ここに来てるわけじゃないのかー？」

まじかい。俺もあるの日以来、来てなかつたんだが……

「本当だつたらすでに規則違反で反省室に連れてかれているぞ。た
だ、お前とは
なにか古い縁を感じるな」

「なんじゅやそりゅ

古い縁つて何だ。こんなヤツと縁があつても邪魔なだけだな。

「それじゃあ俺は帰るかな」

「まあ待て。一つ頼みがある」

「？」

「一体なんだ？」

「この偉い監督生さんが一般ピーポーの俺に頼み」と?
しかも男子で全く関わったことのない俺に?

なんかとても嫌な予感がした。

「まあ、そんな悪い事じゃない。実はだな、最近女子生徒が男子校舎とかに忍び込んでいるんだが……そいつを見つけたら捕まえといってくれ。ちなみに顔写真だ」

そう言われて渡された顔写真を見る。

予想はついてたが

(高科じゃねえかこれ!)

「どうした? コイツ知り合いだって感じの顔して」

「ま、まさか。なんで俺が女生徒と知り合いなんだよ」

「それもそうだな。それで、そいつが最近男子校舎の方に行つて、

カメラで写真を

撮つたりとか、いろいろやる上に、なかなか捕まらないんだ」

そりや そうだらうな。あんな情報屋から隠密術教えてもらひつているんだもんな。

「ま、話はこれだけだ。悪かったな、手間を取らせた。もうこれ以上会うことがない事を願っているよ」

「ひとつとしても、もう会いたくないよ。

そう願うのだった。

……あれ？俺今どこにいるんだ？

今は夜である。

「ヤバイ、完璧に道に迷ってしまった。こっちはたしか海岸の方だけど、帰り道が分からぬい」

「……」
「ようがないから再び歩き出す。ああ、これは食事の時間に間に合わないか……」

そんなとき、向こうから人の気配がした。

（誰か来た！？隠れないと……って間に合わない！）

ガサガサ

そこには、長い髪の毛で、とても知的そうな雰囲気の女の子がいた。この学校の制服を着ているつってことは、この学校の生徒なんだろう。

「なぜ男子生徒がここに立入り禁止のはずだが」

（うつ、やばいぞ）

「じ、実は帰り道が分からなくなってしまったんだ」「帰り道？じゃあ、そもそもどこに行こうとしてたんだ？」

そりやそうだ。ここから女子寮は……すぐそばみたいだし。とりあえず、今日のことを話してみるか。

「……なんだか信じがたいな。まあ、確かに証拠品も持ってるからホントのことだらうけど」

証拠品とは、神条からもひつた高科の写真だ。いや、なんで返さなかつた俺？今はそのおかげで助かつてるけど。

「セレニに誰かいるんですの？」

この声は？

「セレニの茂みに隠れて！」

この女の子に言われて、俺は茂みに隠れた。そのとたん、先生が現れた。

「まあ、天月さん。またあなたでしたの」

「すみません。気分がすぐれないでの、夜風にあたりたかったんですね」

「規則は規則。あなたは成績が優秀なんだから、規則さえ守ればす

ぐにでも監督生

になれるのに」

「すみません」

「だいたいあなたはいつも」

くどくどくどくど

がみがみがみがみ

30分が経過した。

説教が長いな……早くどこかに行つてくれないかな？

「つと、こんな説教は後回しです。この森に不審者が紛れたようなので、天月さん、

あなたも早く寮に戻りなさい」

「分かりました」

テクテク……

「もう出てきても大丈夫」

「ふう、助かったよ」

それでもなんで俺を助けてくれたんだ？

「俺だけ隠れてしまつて」めん

「気にするな。私はいつものことだから。さつき先生が言っていた
不審者は君のことだろう？もし君が捕まっていたらとんでもない事になつていた
「た、たしかに……」

捕まつていたら野球部を退部することになつただろうな。そう考えるとここで助けてくれたのは、本当にありがたい。

「これに懲りたら、もう森の中に入るのはやめといた方がいい」「分かつたよ」

「……それでは」「あ、ちょっと待つて！俺は西園寺。一年生だけど、君は？」

うん、助けてもらつたのに、自己紹介をしないのは失礼だ。

「私は天月五十鈴。私も一年生。」

そしてお互いやろしく、と言い合つ。
……笑うとかわいいな。

「まあここは学校は男子と女子が別々になつてゐるから、もう会うことはないかも知れな
いけど。それでは」

そういうて彼女は去つて行つた。

「それにしても、こんな時間に抜け出して、何してたんだろう？」

そう考えていたら、大変な事実に気がついた。

俺、ビューザーって帰らう。

ガサガサ

また草むらが！？

「あれ、こんな所で何しているんですか？」

「……お前にそ何しているんだ、高科」

トラブルメーカーがやつてきた。なぜここに？

「質問に質問で返すのは良くないと思しますよ。まあいいですけど、私は単なる散歩

です

「嘘だろ」

「よく分かりましたね」

「これが散歩なんてほとんどなさそうだからな。

そもそも夜に散歩はないだらけ。

「暇だから男子寮にでも忍び込もうと思つてたんですよ」

「なぜこんな夜に?」

「楽しそうだからですよ。ただそれだけです。まあ、もひめどりく
れいので帰ろうと

思つてましたが。それで、西園寺君はなんですか?」

「……道に迷つた」

恥ずかしいが、じょうがないのを言つてみると、

ついでに神条から渡された写真の事を言つてみると、

「まあ生徒会のほうから田をつけられていますからね」

と、言われた。

「じょうがないので校舎の方向だけ教えてあげますよ」

「それは信じいいんだよな?」

「さすがにこんな夜まで迷つている人に変な方向教えたりしません
よ」

それなりにいんだが……どうも信用できない。

あ、そうだ。

「そういえば、お前なんであのとき歸つたんだ?」

「へへ、いつ?」

「屋上で会つたときだよ」

すると、なぜか少し照れくしゃみしていった。

うん?俺、何かしたか?

「まあ気にしないで下さい。それより、方向はありますよ」

「あ、ああ」

はぐらかされてしまつたが、今は帰る方が先なので、教えてもらつた方向に行くことにする。

高科に教えてもらつた方向に行くと、旧校舎についた。
……校舎は校舎でも、さすがにそれは違うだろ。やつぱりあいつとは付き合わない方がいいかな？

第1-5話 「再度森へ」

さーと。今度は大江いるかね？

前回と同じように俺は森を歩いていた。暇だから。
別に俺が女好きってわけではない。

ただ……

今度は迷子にならないようにしないとな。

「あの後、帰った時の時間が11時だったからなあ」

そのおかげで寮に入るのも一苦労、飯は食えないで大変だった。
俺が帰った時に荷田君が、お菓子と一緒に食べよう、と誘ってくれたのが
非常に心に染みた。

そう考えていた間に、俺はいつもの場所まで着いた。
だが、また大江の姿は無かつた。

「あれ？ またいないのか……」

むう、アイツそんなに来ることがないのかな？
しうがない、また不審者と思われる前に帰るとするか。

「……そうだ！」

考えたら俺は一度も女子寮を見たことが無いな。
一回くらい見ておくか。

いや、別に俺が女好きってわけじゃないよ?ほんとだよ?
わざわざ言つたけど。

そうして少し歩くと、そこには校舎があった。
ただ、これ以上近づくとバレそうなので、それ以上は近づかない。

「……おお、これが女子寮か」

なんか不思議な気分になる。
何人かの女子生徒とはあつたけど、本当にこの学校には女子生徒が
いるというのを
あらためて認識した。

そのとおり。

「大江さんーあなたはどうしていつもやつてすぐに備品を壊してしま
うんですか?」
「はあ、えろいすんません」
「その言葉づかいもそつ。もう少しちゃんと喋れないの?」
「はい、申し訳ありません!」
「……あなた、ふやけてるの?ガミガミガミガミ」

この声は、天月と会つた時の先生と、大江の声だ。
なにか怒られているようだけど、ここからじや上手く聞きとられな

い。

も少しあづき寄るか。

(はあ、一体どないせえちゅうねん……おつー?)

「せ、先生!」

「ガミ! ガミ! ……はい? どうしました? 大江さん」

「きゅ、急に腹が痛くなつたんで……後で改めて怒られますんで、失礼します」

タタタタタタ……

「あ、大江さん! ?……本当にダメな子ですね」

ガサガサガサ……

ワンワン! (あ、馬鹿な人間がいるぜ)

ワン! (おい、もう一人来るぞ)

ワ……ワン! (い、この匂いは!)

キヤ、キヤン! (悪魔だ、悪魔が来るぞ、逃げるーーー!)

ん? なんかあづちの方で犬が逃げてないか?
あ、大江がこづちに来た。

「やあ、西園寺君。今日はどうしたんや？」

「いや、暇だから話相手でも探してこつちに来たんだけど、見当たらなかつたから

こつちに來たんだ」

「……こつちは女子寮しかないはずやねんけど」

「！」誤解だ！」「

確かに怪しまれるのも無理はない。

「はあ、にしても西園寺君、あんた危な」といひやつたなあ

「何が？」

「いじらへん、あたしの友達多いねんで？」

まさかさつきの犬は……

深く考えない方がいいな。

ワン……（誰が友達だよ、あんなに首を絞めつけたりするくせ

(に)

ギロッ

キヤ、キヤン！(に、逃げひー)

「おい、大江。お前、今すごい睨んでなかつたか？」

「え、嫌やなあ。そんな目しつらんで？」

たぶんあつちで草がガサガサ言つてたから、俺以外の何かを睨んだ
んだろうけど。

今ここにいるとしたら犬か警備員さん。

まさか警備員さんを睨んだりはしないから……犬しかいないけど。

まさか人間以外にも睨んだりするのは効くのか?
ちょっと聞いてみるか。

「なあ、大江」

「ん、何?」

「お前がやつていた槍つてさ、睨んだりするのも武器なのか?」

「だからー、睨んでないつてば。あたし、女の子やで? そんな人なんか睨まんて」

人?なら、動物に対しては睨むと「う」とか。

「つまり、犬に対してはするつてことだよな」

「確かに犬は人じやないけど……分かった、降参や、降参!..」

「なんだ、意外とあつさり認めるんだな」

「これ以上言つたつてどうせ無駄やろ?」

そりやそうかもしれないが。

「で、それつて槍の練習の賜物なのか?」

「槍とはあんまり関係ないけど、要は気迫やな」

「気迫?」

それこそ女の子が使う言葉なのか?
にしても気迫つて……

「結局どうやるんだ?」

「なんや、あんた覚えたいのか。けど、教えられへんな
「なんでだ?」

「これくらい教えてくれたらいいのに。」

別に減るものでもないだろ。」
そう思いながら話を続ける。

「これは古武術の技やからな。教えてもらひおつ思たら、金とねで、
金!」

「金なんて持つてゐ訳ないだろ」

ペラならあるが、残念ながら手持ちが少ない。

「そういう訳で、もし教えてほしかつたらまた別の機会やな
「あともう一つ。睨みつけるだけなのに、それも古武術の技なのか
?」

「教えられへんなあ」

ケチだなあ。まあいいけど。

「他にも重い荷物を軽く持つとかいろいろあるけどな」

なんだそれ、本当に古武術なのか?
なんだか気になるけど……本人が教えるのは金になると言つてゐるし、
しううがないな。

すると、向こうから人がやつてきた。

「カズ、あんたこんなとこにいたの。紫杏が呼んでるわよ、早く
戻りましょ

「ああ、分かつた。すぐ戻るわ」

話し方にたぶん同学年だろ。

眼鏡をかけていて、少し気が弱そうだけど。

「で、あんたの隣にいる「イツはだれ？」

前言撤回。「イツとか呼ばれる時点で、もう気が弱くないのが分かる。

むしろ、この感じはめちゃくちゃ気が強いな。

「こいつは同じ学年の西園寺ちゅー奴や。よろしくうしたつてや」「ふーん。なんでここにいるわけ?しかも私、男子つて嫌いなんだけど」

なぜか睨まれた。しかも、なんか酷い事言われてるし。

「ま、それじゃあ私先に行つてるから」

そう言って彼女は校舎の方へ行つた。

「ま、まあ付き合いにくいかもしけんけどよしあつしたつてや。あ、名前の方は浜野 朱里つて言つから」

そして、大江は浜野の後をつけついつた。

誰もいなくなつたから、俺も帰るか。
これから練習あるしな。

第16話 「練習後」

「よし、次はカーブの投げ込みだ」「はい！」

今は練習中である。さつきの会話を見て分かるように、俺は変化球重視の練習だ。

天道には速球では敵わないが、こつちは変化・技術で勝負と、言つたところか。

ちなみに、キャッチャーは荷田君がしてくれている。

「にしても、西園寺君のカーブは良く曲がるでやんすね」「まあ俺の一番の武器だからな」

中一の頃からずっと練習してきた変化球だ。

なかなか打たれない自信はある。

「じつせなり、もつといこ変化球にする気はないか？」

監督が言つてきた。

いい変化球だつて？そりゃ良くしたいにあまつてるけど……

「どうこいつですか？」

「例えば、そのカーブをスローカーブにしたりするんだ。お前にはそういう才能があるから、出来ると思うんだが、じつする？」

うーん、スローカーブか……

「ニセ、セツバツセツメヒナガマサ

怪我したら嫌だからな。

「なあ、西園寺。今日暇か?」

「なんだ越後? 部活終わつた後なら暇だけど、何か用か?」

「練習に付き合つてくれないか?」

練習か……そりそり疲れてるけど、まあいいかな。
とこうことばで、俺は越後と皿主練することにした。

「110ー……111ー……112ー。」

俺たちは素振りを続ける。

にしても越後、セツバツセツメヒナガマサ

「よし、一回休憩するか」

さすがに練習後に連続で素振りをするのはきつい。
よく体力持つな。俺もまだまだ練習の必要があるな。

「どうだ、また俺と勝負しないか?」

越後から誘われた。

とはいっても、そんな俺の手持ちをポンポン見せたくない。

「いや、今回はやめとくよ。疲れてるしな」

「そうか、なら俺が相手になつてやるよ」

そういうて奥から現れたのは田島だった。

いつから見てたんだか……さつさと出てきたらよかつたのに。

「まあ俺も練習で疲れてるから本気ではないけどな
「別にいいぜ」

そういうて越後はバッターBOXへ、田島はマウンドの方へ歩く。

.....

二人が対峙する。

個人的な意見ではあるが、俺は越後が勝つと思う。

確かに田島は制球力もあり、球種もある。が、越後は今日の素振りを見ていると、

なかなかに調子がよくなつた。

ビュッ!

田島がボールを投げる。そのボールは越後のバットの先を掠めた。
ガシャン！と、バックネットにボールがあたる。

（なんだ、田島も調子がよれそうだな。なら、この勝負、どっちが勝つか分からんな）

だが、案外早くその時が訪れた。
田島はカーブで内角低めを狙う。

「来た　！」

越後は狙つてたと言わんばかりに、いや、狙っていたんだろう。
バットを勢いよくふり、そのバットは見事にボールを捉えた。

カキーン！

快音とともに、ボールは飛んでいく。

（……レフトオーバーって所か。）

勝因としては、素振りの前に越後から頼まれたカーブを打つ練習だ
ろうな。

それがなければまだ分からなかつた。

「ちえ、打たれちまつたか」

「俺の勝ちだな！もちろん俺が勝つたからポテチくらいはおじつで
くれよ」

おい、それ前に俺が言つたセリフ。

「ぐ……まあいいだらう」

「わい、これからどうする？」

「どうあると言われてもな……特にやる」とは無いんだが。
まあ暗くなつてきたから寮に戻るとあるかな。

「俺は戻るけど。一人はどうする？」

「俺は戻るぜ。田嶋は？」

「まだ残つて自主練するよ」

とこ「」と、俺と越後は寮に戻ることにした。

越後の部屋にて。

「なあ……越後。なんでお前つて野球をやり始めたんだ？」

「俺か？」

いや、名前で呼んだし、「」とはお前しかいないから。

「やつぱり、野球は楽しいからかな」

笑つて越後は答える。

そりやそりや。じゃなけりや、越後も俺もここにはいないだらう。

「それに」

それに？それ以外に何かあるのか？

「他のスポーツはルールが理解しにくいだろ」

これは予想外の答えが来た。

お父さんが野球をやつていたとか、近くに野球が好きな人がいるとかなら分かるが、

「……なんじやそりや」

「だつて、サッカーとか意味が分からなくないか？」

しかもサッカーが分かりにくくないと来たか。ラグビーとか普段やらな
いスポーツなら
ともかく、サッカーだ。

「手を使っちゃいけないのに、一部の奴は手を使っているし。そもそもなんで『ゴール

したら一点追加なんだ？』

「そこからかよー」

大声を出してしまった。

けど、無理もないと思う。こんなやつ人生の中で初めて見たからな。

「じゃあなんで野球は理解できるんだ？振り逃げとかフィルダース
チヨイスとかを

理解するのに時間かかったんじゃないかな？」

「何言つてんだ西園寺。あんなの覚えるの簡単だろ?」

……はあ?

ああ、そうか。

こいつ、本当に野球バカなんだ。

とりあえず越後の先輩が帰つてきたので俺は自分の部屋に戻つた。

そろそろ寒くなってきたな。もつ秋も終わつて冬休みが始まるとか。

……時間が過るのが早く感じるな。

第17話 「ポテチは20ペタあります」

「朝でやんすー起きるでやんすよー。」

そんな声を聞き、俺は身体をゆくつと起ります。
どうせならここで美女少女が起こしてくれたらいいのに……まあそんなことはないけどね。

「ん……荷田君、もう朝?」

「だから、朝でやんす、って言つたはずでやんすけど」

あ、そりゃそうだ。

今日は日曜日だけ、これから部活があるのか。

そして俺は一段ベットから出で、ゴーフォームに着替える。
そのまま荷田君と一緒に食堂の方へ移動する。

「おはよー」

「ああ、おはよう

途中で止留つたチームメイトに挨拶を交わしながら、俺と荷田君は席に座る。

「西園寺君は人参が嫌いなんですよか?」

「そうだけど、なんで?」

「いつも最初の方にそれだけ食べてるからですよ」

なるほど。俺は最初に嫌いなものを食べる癖があったのか。

自分でも気付かなかつたなあ……どうでもいいけど。

「な、荷田君はマッショルーム嫌いなの？最初に食べてるけど」「オイラは先に好きなものを食べるんでやんす」

……どうでもいいか。

「ま、俺は先に部屋に戻るよ」

「待ってくれでやんす！今食べ終わるから、でやんすー。」

「準備できた？」
「オッケーでやんす！」

寮で自分のグラブとかを持つていく最中である。
うーん、そろそろグラブがボロボロになってきたな。
新しいのに買い替えたいけど……600ペラかかるし。

「はあ、今日の練習かつたりいなあ
「どうしたんです？北乃先輩」

……嫌な予感がする。実は先日、「こんな」とがあった。

それは寮の付近を歩いていたときである。

「はあ、練習かつたりいなあ」

「だから、といつて練習をわびしちゃ監督に怒られるでやんすよ」

「俺は大丈夫なんだよ」

何が大丈夫なんだろ？

まあいいや、さつとグラウンドに向かうか。

「うつ！ いててて！」

「ど、どつしたんですか？」

「急に膝が痛みだしてきたよー。これじゃ今日の練習は無理だー。」

はあ？

そんなはずないだろ。単に休みたいだけだろ？

「ちょ、ちょっと。北乃先輩、さすがにわびしちゃダメですよ」

「ああ？ ならこの状態で練習に行けって言つのか？」

「い、いや……」

んな無茶苦茶な。

だから野球が下手なんじや…… ゲフンゲフン。

荷田君がこなとじでこねは危ないな。

「やれじや、監督に今日休むつて言つてこでくれ」

えへ、と一人で不満を言つが、もぢりん先輩には通用しない。

「わ、分かりました……」

「ちゃんと帰りにはボテチ貰つてこよ」

こんなことがあつたのだ。

わらわの言葉が、「部活めんぢくわー」とこの意味なので、たぶん今回も同じだろ？

荷田君を見て見ると、困った顔をしていた。

(どうにかならない?)
(無理でやんすね)

そしてあの言葉が出る。

「うーーしてしてー。
「……どうしたんですか？」
「なんだよお前、先輩が痛みを訴えてるんだから、もう少しあないのかよ」

本当に痛みがあるのなら、もつとやうこいつ顔をしてくれ。

それに、そんな事を言わないだろ。

俺は心底めんべくせいながりも、先輩の話を聞くこととした。

「……まあいい。俺は急性胃腸炎にかかつたので練習には行けない

「まあそんなところでしょうけど

バキ！

殴られた。お、親にも殴られた事無いの？！

……嘘です。もう先輩にも何回殴られた事か。
まあそれはおいといて、

「俺はテーマパークに行つてぐる」とするよ。可愛いキャラクターたちと一緒に

遊んでくるぜ。それじゃあ監督に会つててくれよ」

はあ……どうせ俺らが監督に殴られるんだろうな。
いいかげんにしてほしいよ。

「分かったでやんす。ナビ、お金はあるんでやんすか？」

確かに。お金は全部取り上げられてるはずだし、そもそもこの時間、
バスは無いはず。

「やつやつて行くんだるいへ、

ま、まさか、かの呪文　ーー

「俺は特別な携帯を持つてゐるからな。そいつくんは別にヤツヤツでもなるんだよ」

なんだ、ルー　じやないのか。期待したのに。

(西園寺君)

(なんだ、荷田君?)

(それは無いでやんす。ゲームのやり過ぎでやんす)

(.....)

突つ込まれた。

「それじゃ、俺は行つてくるぜ」

「あ、はー」

そう言つて先輩は携帯で誰かと話し始めた。
おつと、練習の時間が始まるな。急がないと。

「……ということで、北乃先輩が休むそうですね」

「分かった」

さつきの先輩のことを言つと、監督は考え込み始めた。

(北乃の奴、俺をなめてるな?)

「それじゃあ俺たちは練習に戻ります

「待て」

監督に止められた。

ああ……やっぱりこうなるのか。
だいたい分かつてはいたけど。

「北乃の代わりの練習をお前らがやれ。まずはランニング10周!」

「はい……」

「声が小さい!」

「はい!」

トホホ……と俺たち一人はグラウンドを走る羽目になつた。

後日、北乃先輩が監督に怒られていた。

……あれ？ 大丈夫なんじゃなかつたのかな？
けど、なんかいい氣味だ。

（そりでやんすね！）

荷田君に突つ込むのはもうやめよ！

第18話 「掃除」

「あはは、それでさあ～」「え、そつなんでやんすか！？.」

俺と荷田君は、一人で会話しながら部室へ向かう。この会話は単なる世間話です。

ガチャ

部室の扉をあけると、そこにはとんでもない臭いが漂っていた。とつあえず、とてもくさい臭いだ。

「な、なんでやんすか！？」の臭いは
「一体どじからー？」

おぞるおぞる近づいてみる。

だが、どじにその原因があるかは全く分からぬ。
一体どじ……？

「お、何やつてんだ西園寺」「つづー.」「どじした、越後、つづこの臭いは？」

越後と田島がやつてきた。後ろを見ると面取と畠田もいる。とつあえずこの4人は異常に氣づいたようだ。

「お、おこ西園寺。一体こればどじことじだ？」

田島が聞いてきた。

と、言われてもねえ。

「俺もよく知らないんだけど、今部屋に入つたらこんな臭いが漂つてたんだよ」

「そうか……2週間程前から変な臭いがしてたのは知つてたが、急にこんな強くなるとはな」

気づいてんなら捨ててくれよ……

そう言いたかつたが、とりあえず抑えることにした。

とりあえず今はこの問題を片づけることが先だからな。

「とりあえずこの臭いの原因に心当たりのある奴いないのか?」

「それが分かつたら苦労しないでやんすよ……」

あ、そりゃそーカ。

ならもう、これは我慢して探すしかないな。

「ま、それじゃあ他の人が来る前にやるか

「やれやれだぜ」

「腹減つた」

ということで、俺たちは掃除することになった。

ちなみに、2人目の言葉は越後、3人目は岩田である。

「おい、これなんだ?」

その越後の声に全員が振り向く。
しかし、越後が持つてゐる物は臭いの原因ではなかつた。
だが、それは俺らが全く見たことのないものだつた。

「越後、それなんだ?」

聞いてみる。

「だから俺が聞いてるんだって。なあ田島これなんだ?」「俺がこの中で一番学力高そうだから判断したんだろうが、俺もしらないぜ」

ちなみに、その越後が持つてゐるものとはピンク色の花だつた。
チユーリップとかではなく、俺たちが知つてゐる物ではなかつた。
けど、見た感じ毒がありそうでもなかつた。

「ああ……腹減つた。それ食べてもいいかな?」

「いや、危ない、危ないから。こんな所にある花だぞ」

「そうか……なら頂きます」

そういうて苗田ばいの謎の花?草?を食べ始めた。

「ちょ!危ないって!」

毒でも入つてたらどうする。入つてなさそつだけど。

ムシャムシャ……

「味の方はどうでやんすか?」

「うん、なかなかいける。力がついた感じ」

「へえ、それはいいな」

「いにもう一個あるから、官取もいつとくでやんすか?」

「いや、俺はいよ……」

まだあつたのか。それより早くお前ら探せよ……

「うん? おい、いのロッカーから変な臭いがしないか?」

そう言つて田島が指したロッカーからは確かに変な臭いがした。
これはビン^ハか?

「た、たしかにこれはやれやれだぜ……」

「いの中には何があるんでやんすかね?」

それじゃ開けるぞ、といつ田島の声でそのロッカーは開いた。
それと同時にものす^ハこの悪臭がロッカーから出てきた。

「い、これはすごい臭いだ!」

「早く誰かこの原因の物体を外に出せー!」

上から岩田、官取だ。

とりあえずいの物体はなんなのか確認してみる。

「「」、これは……シャツ？」

「あ、汗だ……汗を吸つたアンダーシャツが発酵してるものす」「この臭いを出しちゃうんだ」

「つまあえず名前でも書いてないか……あれ?このタグの所に名前があるで?」

「えつと……」「、だ?」

「これ荷田君のじゃないか!」

「オ、オイラのシャツでやんすか!?あ、そういうえば前にシャツが一枚無くなつてたでやんす!..」

お前のだつたのか……

「つまあえず早く」れ处分しろよ」「み

「嫌でやんす!..」になつたりも「れはオイラのじゃないでやんす!..」

「何言つてゐんだ君は!..」

意味のわからない理屈だな!..」「供でももつチヨイまともな轟四つ
ぞ。

「いいから捨てろよ

「しようがないでやんすね?..」、「捨ててやるでやんす」

「ああ、有難い!..」って「これはもともと荷田君のだろ!..」

「それじゃ行つてくるでやんすよ

そう言つて荷田君は外へ行つた。

たぶん焼却炉にでも行つたのだろう?..「それで一件落着、あれ?まだ

臭いが……？

「お、おい。まだ何か臭いが残つてないか？」

「越後、お前もか。気のせいだよな？」

越後と田島もまだ臭いを感じるらしい。

ま、まだあるのか！？

「あ……もしかして」

「なにか心当たりがあるのか？」岩田

そう言つて岩田は一つのロッカーに手を伸ばした。
そのロッカーが開くと

「うわ、臭つ！！」

岩田以外の全員が一步後ろへ引いた。

い、一体これは？

「俺が昔おなかが空いた時の為に取つて置いたおにぎりだ。前探し
て無かつたけど、

こんなところにあつたのか」

そこには真つ黒になつていてるおにぎりがあつた。
きつとものすゞくカビが繁殖しているんだらう。

「い、岩田。いいから早くそれを捨ててくれー。
分かつた」

越後の頼みにより、岩田は窓のまづに歩いて行つた。

……窓？窓つて扉の反対側だよ？ビルでここの？

「アーレフ」

ピコーン、

掛け声とともに若田のおにぎりは放物線を描いていった。
臭いが一気に和らぐ。

「おにぎりが糸を引いていきれいだったね」

「全然きれいじゃないから」

「ア……とも疲れた。もともと寮に戻るか。

後日。またこんな事が無いように自分のロッカーを掃除していくと、
パソコンとペラが見つかった。超嬉しかった。

第18話 「掃除」（後書き）

パソコン = ドリンクです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481x/>

俺と野球と奇跡（パワポケ10）

2011年11月4日17時21分発行